

## 『宇治拾遺物語』説話の文章構造

——話末評語を手がかりに——

はじめに

宇治拾遺物語は、今昔物語集との間に多くの類話を持っていることが知られているが、画一的な表現をとる今昔物語集とは違い、宇治拾遺物語では冒頭句の種類や話末評語の有無やその様相において、多様な形式・内容が見られる。そのような多様さは本書が、今昔物語集のように一つの方針によって統一的に編集を加え表現を調整するという面が少なく、様々な出典の本文をある程度踏襲したためであると解される。そこに見られる種々の表現には、画一的に整備された今昔物語集よりも、説話の表現構造を多様な角度から見ることでできるという利点があるのである。

本稿では、宇治拾遺物語の各説話の最末尾の一文を取り上げて、それがどのような文末形式をとって終わっているか、また、それが、

藤 井 俊 博

話末評語の表現内容とどのように関わっているかについて考察することにする。その観点としては、話末文の文末形式を助詞・助動詞の組み合わせの形式として整理する。また、話末評語と冒頭句との関わりを考察し、『宇治拾遺物語』説話の文章構造について私見を示したい。なお、テキストには日本古典文学大系本を用いた。

### 一 説話の話末文の文末形式

ここではまず、宇治拾遺物語の全一九七話の話末文の文末形式を、助詞・助動詞の組み合わせを主とし、名詞・動詞・形容詞で終わる場合も含めて整理する。宇治拾遺物語の話末の一文には大きく、「と」「とぞ」「とか」「となん」「とかや」等の「と（＋係助詞）」を承けて終わる形式と、これらを承けずに終わる形式とがある。ここでは、「と」に上接する表現形式に着目し、「と」を承けない場合の

表現形式と比較することにする。なお、「と」のあとに付く「ぞ」「なん」などの係助詞の助詞の種類については繁を避けて区別せず、「と」で受ける場合として一括する。

【「と」で承けない文末形式】(二二七例)

けり けり(係り結び) 一八例・けり(連体止め) 四例・けり

(終止形) 一七例・けり(係り結び流れ) 三・にけり七例・

にけり(係り結び) 三例・なりけり三例・にてありけり一

例・にてありけり(係り結び) 一例・てけり二例・れけり一

例・たりけり(係り結び) 二例 りけり(連体止め) 一例

(合計六三例)

なり なり九例 けるなり七例 し(こと)なり四例 まじき

(こと)なり三例 るなり一例 べきなり一例 たりけるな

り一例 けるにや三例 にこそ一例 なりかし二例 なり

(係り結び) 一例 ざりけるなり一例 (合計三四例)

たり たり一例 たり(係り結び) 三例 れたり二例 (合計六

例)

形容詞 形容詞(終止形) 二例 形容詞(連用形) 一例 形容

詞(連用形) +こそ一例 形容詞 +やな一例 形容詞(係り

結び) 一例 (合計六例)

ず ず二例 ぞぞ一例 べからず一例 (合計四例)

む む一例 やらむ一例 べからむ一例 (合計三例)

き き(連体止め) 一例 き(係り結び) 一例 (合計二例)

べし べし二例

り 二例

る 二例 る(係り結び) 一例 (合計二例)

けむ 一例

名詞 一例

動詞 一例

【「と」で承ける表現の文末形式】(七〇例)

「けり」 「けり(連体止め) +と」 一三例 「けり +と」 一〇例

「けり(係り結び) +と」 六例 「にけり +と」 五例 「たりけり

(係り結び) +と」 二例 「たりけり(連体止め) +と」 二例

「てけり +と」 二例 「てけり(係り結び) +と」 一例 「なりけ

り +と」 一例 「たるなりけり +と」 一例 「りけり +と」 一例

(合計五四例)

「動詞 +と」 四例

「なり(断定) +と」 三例

「名詞 +と」 二例

「ぬ +と」 一例

「たり(連体止め) +と」 一例

「なり（伝聞）＋と」一例

「り＋と」一例

「ず＋と」一例

「じ＋と」一例

「形容詞＋と」一例

これらの「と」に上接した助動詞の使用状況は、「と」を付さない場合の助動詞の使用状況と大きな傾向は一致している。すなわち、「けり」がその主流であり、その内訳として「けり」（終止形）「けり」（係り結び）「けり」（連体止め）の三者が多い点が共通する。ただし、「と」で承けない場合は「けり」（係り結び）が多く、「と」で承ける場合は「けり」（連体止め）が多いという相違点が認められる。また、「と」で承けない場合には「む」「べし」「けむ」などの推量系の助動詞や「き」が用いられるのに対して、「と」で承ける場合の独自のものとして「ぬ」「なり（伝聞）」「じ」が用いられる点が相違点として上げられる。

「と」を付す形式は、後ろに係助詞を伴っている場合が多いが、その結びの述語が表現される例はない。また、係助詞のない単独の「と」で終わる例も二例あることから考えると、現代に伝わる昔話で「〜とさ」というのと同じように、意識としては「と＋詠嘆の終助詞」と捉えられると思われる。「と」は「けり」の後に続くもの

であることから、「と」は「けり」のさらに外側にある枠組みとして、説話全体を包摂して纏める役割を持つと考えられるが、「と」と文章構造との関わりについては四節で詳しく考察したい。

## 一 話末評語の内容と文末形式

前節の調査により、「と」を付す場合と付さない場合に分けて検討した結果、どちらの場合においても、文末形式は「けり」を中心として見られることがわかった。しかし、その他の助動詞も含めて、どのような文末形式で、どのような内容を表しているのが問題である。ここでは、「と」の有無や助動詞の表現形式と話末評語との関わりについて考察する。

次に、宇治拾遺物語における話末評語と文末形式との関わりを見ておきたい。宇治拾遺物語における話末評語は、先学の研究<sup>①</sup>を踏まえると、次のような内容に整理することができる。

後日談 説話本体が終わりその後の人物の動向を述べるものである。説話本体の内容と連続的で区別しにくい場合もあるが、「その後」などの導語がその目印になる。

教訓 説話本体の内容を受け、どのように考えたり行動すべきであるかを述べる。

批評 説話本体の内容に対して語り手の立場から主観的な批評

を述べる。

解説 説話本体の事件・人物に対して語り手の立場から解説を加えるものである。

伝承 誰による語りであるか、あるいは書物の出典を明記するものである。

また、これらの評語がある説話の他に、右の五つの内容を持たない説話がある。以下「評語無し」と称する。

宇治拾遺物語では説話本体と話末評語の内容が一文に繋がって書かれている場合もあるが、話末文の文末形式を見ることで話末評語の文末として扱うことができる。また、話末評語には、これらの複数の内容が複数の文に分けられて書かれていると見られるものがあるが、本稿では話末の一文の内容と形式のみを扱う。さらに、伝承を表す例では、その伝承内容として他の評語の内容が含まれる場合もあるが、処理としては伝承として扱う。また、教訓や批評が語り手の立場から書かれたものと他人の言の引用によって書かれたものとがあるが、区別せずに扱う。

次にあげる表1・2は、前節であげた助詞・助動詞を含む文が右の各評語内容のどの内容を持っているかによって区別したものである。前節では活用語について、「終止形」「連用形」「係り結び」「連体止め」などによる区別をしているが、表では区別していない。

次に「と」を伴う場合と伴わない場合を通して、説話本体（評語なし）と各話末評語に特徴的な文末形式をまとめておく。

説話本体 けり にけり てけり

後日談 けり にけり

教訓 べし まじきなり べきなり べからず

批評 なり む けむ 「うたてし」「おそろし」「こころうし」「めでたし」「をかし」などの形容詞。

解説 なり けるなり なりけり

伝承 きしなり るなり たり

これらの助動詞には、偏って現れて評語内容の特徴づけているものがある。次のようなものである。

○話末評語無しと後日談では、説話本体と傾向が近く「けり」を中心にしており、また「にけり」「てけり」など事件の終結を印象づける表現が見られる。

○教訓は「べし」「まじ」を用いて、行為を勧めたり諫めたりする表現を採る。

○批評は、「む」「けむ」など主観的な助動詞を用いるのが特徴である。「なり」によって「おぼゆるなり」（一七七話）のように語り手の言説が顕わに見られる例もある。

○解説は、「なりけり」「にてありけり」（終止形）「にてありけり

評語無し	伝承	解説	批評	教訓	後日談	
14	5	3	4		13	けり+と
3					2	にけり+と
1					3	たりけり+と
3						てけり+と
					1	なりけり+と
		1				たるなりけり+と
1						りけり+と
	1	2			1	動詞+と
		1		2		なり(断定)+と
1				1		名詞+と
1						ぬ+と
					1	たり+と
			1			なり(伝聞)+と
					1	り+と
					1	ず+と
					1	じ+と
		1				形容詞+と
24	6	8	5	3	24	合計

表2

評語無し	伝承	解説	批評	教訓	後日談	
21	5	3	2		10	けり
5					5	にけり
	1	2				なりけり
1			1			にてありけり
2						てけり
2						れけり
2						たりけり
1						りけり
		3	6	1		なり(断定)
			2			なりかし
	1	4	1		1	けるなり
	3	1				し(こと)なり
				3		まじき(こと)なり
	1					るなり
				1		べきなり
		1				たりけるなり
		1	2			けるにや
				1		にこそ
		1				ざりけるなり
	3			1		たり
	1		1			れたり
1			5			形容詞
1			1	1		ず
				1		べからず
			1			む
			1			やらむ
			1			べからむ
	2					き
				2		べし
		1			1	り
		1	1			る
			1			けむ
			1			名詞
		1				動詞
36	17	19	27	10	18	合計

表1

り」（係り結び）など、「なり」による説明的な形式が特徴である。○

○伝承は、「なりけり」「けるなり」を取る点などは解説に近いが、「かたりし」のように「き」系統の表現をとる点に特色がある。以上の話末評語全体の傾向を纏めると、「けり」「にけり」「てけり」「りけり」など「けり」によるものは、説話本体の末尾と後日談に多く用いられ、説話本体と後日談とが表現内容としては連続的なものであることを示している。また、解説と伝承とはともに「けるなり」「なりけり」などの形式を持っており、表現内容としては近いものであることを暗示している。

伝承の話末評語において、「かたりしなり」のように用いた「しなり」「き」や「申し伝たる」のように用いた「たり」「る（なり）」など、語り手のいる時間を基準にした「過去」の表現、あるいは語り手の時間における「存続」「完了」などを意味する助動詞が見られる。これらには「と」を付する例が見られず、「と」を伴う場合は、登場人物や物語世界に関連する人を主語として「かたりけるとぞ」のように「けり」を伴って用いるのである。この「けり」は語り手の時間から見て過去であるというよりは、「あなたなる世界」<sup>②</sup>の虚構空間であることを指示する機能を持っていると言われている。これに対して、「き」は現実の過去を想起させるものであり、その

ために伝承に真実味を与えることにもなる。このような性質を持つ「き」は、「と」とは結びつきにくいのであり、話末文の表現内容によつては、「と」を付するのを避ける場合があると見られる。

そこで、さらに「と」と結びつきにくい場合を確認しておく。表1を見ると、「と」を採らない場合は「けり」以外の助動詞にも広がりが見られる（「けり」は六三例・五〇%）。すなわち、「き」「たり」などの過去・完了の助動詞の他、「なり」「べし」「む」「けむ」など語り手の判断が強く表れた助動詞の中に含む文末形式の場合においては、「と」を伴わない場合に偏っている。一方、表2を見ると、「と」を採る場合は、「けり」を受ける場合に多く集中していることがわかる（「けり」は五三例・七八%）。とりわけ「後日談」と「評語無し」に「けり」が集中していて、後日談以外の話末評語を承ける「と」の例は少数である。このことは、「と」が「けり」で枠づけられた説話本体と親和度が高く、また後日談などの話末評語も容易にこれを包摂することもできるが、話末評語の表現内容に語り手の立場からの主観的な表出があるときには、「と」によつて包摂しようとしていないと考えられる（表2で「じ」一例「なり」三例が主観的なものの例外であるが、この中で「なり」による解説の話末評語を「と」を承けた二例は、古本説話集に対応する例があることを四節で後述する）。

撰者が付した話末評語をも含めて話全体を伝承の「トヤ」でまててしまおうとする今昔物語集に対して、宇治拾遺物語では「と」を最末尾に用いることを一つの型としてはいるが、主観的な立場からの話末評語がある場合には、無理には「と」を付して統一しないという柔軟な態度を示していると解される。

### 三 冒頭句と話末評語との対応の検証

次に、宇治拾遺物語に見られる冒頭句「今は昔」「是も今は昔」「昔」「是も昔」などが、話末文の内容と呼応的に用いられているものがあるかを見ておく。今昔物語集では、冒頭句「今（ハ）昔」が話末の「トナム語り伝ヘタル」という伝承の表現に係って（修飾して）、「昔から今まで言ひ伝へてある話に」の意味を表すとする春日

表3

					後日談
					教訓
					批評
					解説
					伝承
					評語無し
					合計
冒頭句無し	5	1	8	8	19
是も昔	0	0	1	3	9
昔	2	0	6	12	12
	2	0	6	8	12
	2	0	4	4	13
	2	0	8	32	18
	13	1	33	67	83

和男氏の説がある。宇治拾遺物語においてそのような伝承の表現との対応関係が強く見出せるものであるかを検証し、冒頭句と話末文の関連の有無について論じておきたい。次に、これらの冒頭句と、

話末文の内容との関係を表に示しておく。

表3によると、各冒頭句と話末文の表現内容との間には特別な相関性は見出し難いことが分かる。「今は昔」では伝承との対応は特に多い方ではなく、どの評語も平均的に現れている。「是も今は昔」ではむしろ伝承と対応する例は少ない方である。今昔物語集ではほとんどすべての説話で「今（ハ）昔」トナム語り伝ヘタルトヤ」となるので、あたかも緊密な対応関係があるかのように見られがちなのであるが、後述のように、出典の表現を踏襲する傾向の強い宇治拾遺物語の実態では、そのような対応関係があるとは言いがたいのである。今昔物語集の場合は、冒頭と結尾の表現を統一的に整備し、慣用的・形式的な枠組みとして用いているとは言えるであろうが、冒頭と結尾で内容上の呼応関係があったかとなると別問題である。現に、次に示すように、宇治拾遺物語では「今は昔」と「昔」と、どちらにおいても「語り伝へ」の表現と共起している例を指摘することができる。

- 今は昔〜とぞかたりつたへたる（二一話）
- 今は昔〜かたりつたふるなりけり。（九七話）
- 今は昔〜とぞ申伝たる。（一七二話）
- 今は昔〜とぞかたり伝たる。（一七三話）
- 昔〜となん申つたへたる。（九一話）

「今は昔」の意味を「昔から今までずっと」のように解する説は、話末の「となむ語り伝へたるとや」に係る（修飾する）という解釈に立脚しているのであるが、九一話<sup>③</sup>のような例がある以上、「今は昔」が「語り伝へ」と特別な関連があるとは言えないであろう。

宇治拾遺物語で特有の冒頭句として、「是も今は昔」という草子地的表現（語り手の立場から解說的に述べた表現）があるが、「今は昔」自体がもともと草子地的な性格を持つ表現であったと思われる。筆者は、馬淵和夫の説により「今は昔」を草子地的表現として「これは実は昔のことなのだが<sup>④</sup>」という意味であると解する。そして、草子地的とはいえ「今は昔」が「昔」と同じく説話世界の時間を指定したものである以上は、冒頭句はあくまでも説話内容の一部をなす要素であると理解すべきであると考ええる。

なお、宇治拾遺物語の伝承の表現には、個別の出典を表す場合も見られる。例えば次の例は、「是も今は昔<sup>⑤</sup>」を用いる説話で末尾に伝承の話末評語を採っている例であるが、これらはそれぞれ『続本朝往生伝』『日本霊異記』が出典とされている説話である。

○是も今は昔く往生伝にいとか。（七三話）

○是も今は昔く供養してけりとぞ。日本の法華験記に見えたと  
なん。（八三話）

これらは、口承ではなく書承であることを付加して表現している。

特に八三話の例は、「とぞ」で説話内容を結び、さらに話末評語を加えて「となん」で承けており、二重に「と」を用いた例として注目される。これらの伝承を内容とする話末評語は、説話内容の枠外に加えられたことが明らかなるものであり、冒頭句と意味的な結びつきがあるとは言えない。

#### 四 『宇治拾遺物語』説話の文章構造について

宇治拾遺物語の説話には話末評語がないものと話末評語があるものとがあるが、前者においては、話末文は説話本体の各種の表現形式が現れ、また後者においては、話末評語の特徴的な文末形式を見ることができるといえる。次に、説話本体と話末評語に分けて考察する。

説話の展開部において内容の骨格をなすのは動詞文であるが、その各文の文末形式には説話内容に対する語り手の視点が現れてくる。すなわち、動詞終止形やそれに「つ」「ぬ」「たり」「り」等が付された文では、説話内容そのものを捉えた表現として表現されているだけで、語り手の視点は積極的に示されていない（Ⅰ文とする）。

これらにさらに「けり」が付された文は、表現内容を「あなたなる世界」の表現として捉えた語り手の立場を表現するものと解される（Ⅱ文とする）。すなわち、説話本体で事件の展開を表す各文は、次のⅠ・Ⅱ文のいずれかで表される（丸括弧内は表さないこともある）。

語)。

Ⅰ文 「動詞(十つ・ぬ・たり・り)」

Ⅱ文 「動詞(十つ・ぬ・たり・り)+けり」

説話では、各文の文末の全てを「けり」で表現する場合(すべてⅡ文の場合)もあれば、冒頭や結尾において「けり」を伴う形式を採って、展開部の途中では適宜「けり」を採らない表現を入れる場合(冒頭や結尾でⅡ文を採り展開部では適宜Ⅰ文を採る場合)もある。後者のような、展開部で「けり」を採らない場合は、

冒頭部と結尾部で「けり」を採ることによって、一文ごとに「けり」を用いる場合と同様に説話内容に対する語り手の立場を表現するのであり、この型が多くの説話の常套的な構成方法となっている。

また、例えば今昔物語集の天然部の説話などでは、結尾部にのみ「けり」を一回用いるような例が多く見られるが、これらの説話において冒頭部、展開部ですつと「けり」がなく現在形で進められた事件の内容について、結尾部の「けり」によって全ての内容を受け止める形を採るが、これらは、特に話末の「けり」が説話本体の枠として重要なものであることを示す端的な例である。特に、最終段落に現れやすい「てけり」「にけり」などは内容の区切れに現れやすい表現形式であり、それをもって説話本体の終わりという目印になる場合が多い。

一方、話末評語では、説話本体を受けて、「けり」を用いて後日談を述べたり、「べし」「まじ」「む」「なり」「き」など語り手の立場を表す主観的な助動詞を用いて教訓・批評・解説・伝承などの内容を読み手に伝えようとする。「なり」には、さらに「けり」が下接することもあるが、これは説話全体を統括する語り手の表現として「けり」を用いるためである。

以上を纏めると、説話全体の文章の表現構造を、次のような入り子構造で示すことができる。



宇治拾遺物語において、最後にこれらの説話内容・話末評語をさらに外側から受け止めるのが「と」であると考える。「と」が話末評語の外にあるというのは、話末評語が宇治拾遺物語で付加されたのではなく、出典から伝承されたものと考ええるからである。

話末評語の後に「トヤ」を付す形は、今昔物語集ではほとんど徹底していると言える。しかし、説話本体が伝承の内容となるのは当然としても、今昔物語集で新たに付された話末評語が「トナム語り伝ヘタルトヤ」という伝承表現に包まれた形になっているのは表現の整合性から言う問題と問題を孕んでいる。例えば、鎌倉時代の説話集

『閑居友』に多く見られるように、撰者による話末評語が語りの内容と区別する形で表現される場合は、「むなしく命をはりぬとん」。このことは……（『閑居友』一）のごとく、「と」の枠外に置く方が、自然であると考えられるからである。

そこで、次に、宇治拾遺物語の「と」で終わる説話の中から古事談・古本説話集と出典・類話の関係にある話を取り上げ、それらに見られる話末評語との関わりの中から考察しておく。

まず、古事談を出典とする場合、宇治拾遺物語で「と」で終わる話は八話ある。内訳は、「とぞ」「とか」が出典の「云々」に対応する例が三例（六〇・六一・一一六話）、「とぞ」「とか」に対応する語句がなく翻案に際して付したと思われる例が五例（六四・六六・六八・六九・一三五話）である。古事談の「云々」に対応する三例の中で六〇話と一一六話の二話は古事談に後日談の話末評語を含み、宇治拾遺物語でもそれを踏襲している（その他の六話は古事談にも宇治拾遺物語にも話末評語が存在しない）。

次に、古本説話集の類話に当たる説話の場合、宇治拾遺物語で「と」で終わる話が四話ある。その中で、古本説話集に「と」がない二例（八九・九六話）は、古本説話集の後日談の話末評語が宇治拾遺物語でも同様に見られる。これは宇治拾遺物語で後日談に「と」を付したと推測できる。また、古本説話集でも「と」で終わ

る話が二例（一〇一・一五〇話）あり、いずれの話でも古本説話集の解説の話末評語が宇治拾遺物語でも同様に見られる。

一〇一・一五〇話のように、類話の古本説話集において後日談以外の話末評語に「と」を付した形があり、宇治拾遺物語でも同様の形に対応する場合がある。これらは両書の出典の表現を踏襲したものであると推測することができる。一方で、六〇・一一六話のように出典の古事談の「後日談＋云々」を承けた例や、八九・九六話の例から推測されるように、出典の後日談の話末評語に宇治拾遺物語で独自に「と」を付したと見られる例もある。後日談の話末評語には「と」が付されやすいことがわかる。

宇治拾遺物語の話末評語は、出典・類話の古事談・古本説話集とほぼ同じ内容が対応して見られる。このことは宇治拾遺物語の話末評語に撰者独自のものがないことを示している。宇治拾遺物語の説話本体と話末評語がともに出典によるものである限り、最末尾に「と」を付すことも不自然ではない。しかし、宇治拾遺物語では説話本体で終わる話や後日談を含んだ話以外では、積極的に「と」を付すことはなかったようである。宇治拾遺物語では、出典の話末評語の内容や形式の影響を受けつつも、「と」を付す際に独自の表現規制が働いていたと推測できる。

注

① 話末評語の種類は、松尾（一九八二）によりつつ、菅原（一九九七）によって後日談を含めた。

② 竹岡（一九六三）の考えに従う。筆者は、語り手のいる時間から見て過去を表す「き」に対して、「けり」は語り手のいる時空から見て異次元の時空に在ることを意味すると考える。なお、「けり」の枠としての機能については渡瀬（一九九八）に詳しい。

③ 井島（二〇〇五）は、「今は昔」で始まる物語は表現時現在の出来事に言及することによって結ばれる（そしてそこにはしばしば表現時現在の「今」が現れる）とするが、宇治拾遺物語（九一）は「昔」で始まり「今は申つたへたる」で終わっている。このような例は打聞集や法華百座聞書抄などの説話にも多く見られる。今昔物語集のように意識的に表現が統一された作品だけを根拠にするのは危険である。なお、春日は話末の「と」との関連を述べるが、「と」との共起例は、「今は昔」二一例、「是も今は昔」三七例、「昔」八例で特別の関連は見出せない。

④ 筆者は、「この話の時は実は昔のことなのだ」の意味の草子地的表現であると解する。詳しい立論の根拠は、藤井（二〇〇三）を参照のこと。なお、「今では昔のことだが」と解する立場による場合でも、「今は昔」は、同様に説話内容の一部であると解することができる。

⑤ 「是も今は昔」は古事談など、冒頭句を持たない漢文説話を典拠とする場合に付け加えられた例がある。

参考文献

井島正博（二〇〇五）「中古和文の時制と語り―「今は昔」の解釈に及ぶ―」（『日本語学』24）  
春日和男（一九七五）『説話の語文―古代説話文の研究―』（桜楓社）

菅原利晃（一九九七）『宇治拾遺物語』の教訓の独自性―評語から見る教訓的要素の可能性―（『札幌国語研究』2）

竹岡正夫（一九六三）「助動詞『けり』の本義と機能―源氏物語・紫式部・枕草子を資料として―」（『国文学言語と文芸』31）

藤井俊博（二〇〇三）『今昔物語集の表現形成』（和泉書院）  
松尾拾（一九八二）『今昔物語集注文の研究』（桜楓社）

馬淵和夫（一九五八）『説話文学を研究する人のために』（『国文学解釈と教材の研究』3）11）

渡瀬茂（一九九八）『今昔物語集』の枠構造における「けり」の古代的特質とその変容』（『富士フェニックス論叢 中村博保教授追悼号』）